

立命館大学新世紀平和企画

「二一世紀における共生の可能性を求めて―大学の挑戦」

―京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、「わだつみ像」建立五〇年記念―

伊藤 昇

一.はじめに

立命館は建学の精神である「自由と清新」、教育理念である「平和と民主主義」に立脚して、教育・研究機関として時代と社会の要請に応える努力を先進的・創造的に積み重ねてきた。そして学園は現在、立命館大学、立命館アジア太平洋大学、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校を擁する総合学園として大きな発展を遂げた。

立命館学園が今日、大きく発展したその基礎を形成したのは、戦後初代学長・末川博（一八九二年一月二〇日～一九七七年二月一六日）の尽力によるところが大きい。「京大事件」の立役者であった末川は、戦争

に対する深い反省、とりわけペンを銃に代えて戦場に散った学徒出陣に深い悲しみと強い自戒の念をもち続け、戦後いち早く国家主義的傾向の克服に努め、憲法と教育基本法にもとづく「平和と民主主義」を教学理念として高く掲げて、教育・研究・管理運営の基軸に据えた。立命館土曜講座（一九四六年）、全学協議会制度（一九四八年）、総長公選制（一九四九年）、「わだつみ像」建立（一九五三年）、これらは何れも半世紀以上を経た現在も連続と継承している「立命館民主主義」を象徴するものである。

ところで二〇〇三年は、時あたかも「京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、『わだつみ像』建立五〇年」の年にあたる。「京大事件、学徒出陣、『わだつみ像』建立」これら三つの歴史上の出来事は一つの歴史的文脈の中でとらえることができる。すなわち――

滝川幸辰^{（たきがわゆきちん）}京都帝国大学教授が著した『刑法読本』（一九三二年六月、大畑書店刊）で論述している内乱罪などの



園部逸夫立命館大学法学研究科客員教授

刑法学説が、共産主義的であり大学令に違反するという理由で、一九三三年五月、鳩山一郎文部大臣は滝川を休職に処した。この処分は、京大法学部教授会の議決を得ることなく、また京大総長の上申もなく行われたため、京大法学部の全教官は、学問の自由と大学の自治を破壊するものであると強く抗議して、辞表を提出した。世に言う「京大事件」である。時の立命館総長・中川小十郎は、「今や官学と私学との差別は次第に薄くなりつつあるの今日なれど、本学がその実質において官学である帝大の一と比して何等遜る所なきの事實を示し得るに至ることは独り我学園の為に喜ぶべきことであるのみならず広く私学全般の為に今後重要な結果を生ずることとなるべし」（『立命館百年史』通史一）として、辞職教授一七名を本学に招聘した。佐々木惣一以下、田村徳治、末川博、恒藤恭、佐伯千仞、大隅健一郎、黒田覚、大岩誠、田中直吉、加古祐二郎、於保不二雄、大森忠夫、中田淳一、森口繁治、森順次、石本雅男、浅井清信の一七名である。「京大事件」で辞職した教員を十七名も招聘したこの人事は、立命館の社会的評価を一挙に高めた。しかし、「京大事件」を契機として学問の自由と大学の自治は危機に瀕し、日本の教育と政治は急速に軍事色を強めていくことになった。

「京大事件」から一〇年後の一九四三年、日本の敗色が次第に濃厚となるなかで、東条内閣は「在学徴集延期臨時特例」を公布し学徒の徴兵猶予を停止した。併せて徴兵年齢は一九歳に引き下げられた。同年一月二一日（木）午前八時から秋雨のなか明治神宮外苑で行われた文部省・学校報国団本部主催の出陣学徒壮行会が行われた。「その同時刻、ラジオでこの中継放送を聞きながら立命館大学校庭では一五〇〇名が参加する出陣壮行会が挙行されていた。在学生代表宮崎元太郎の壮行の辞、出陣学徒代表村上二郎の決別の辞があ

り、立命館中学吹奏楽隊の伴奏で『海ゆかば』が斉唱された」（『立命館百年史』通史一）。これら学徒兵の多くは危険な第一線に配属され、海軍飛行科予備学生や、陸軍飛行学校を卒業して特別操縦見習士官になり、特攻として戦死した者も多かった。また、海軍兵科予備学生のなかには人間魚雷で亡くなった者も少なくなかった。

敗戦後の一九四九年、戦没学生の悲痛な体験を後世に伝え、反戦・平和の誓いを新たにするため戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』が刊行され、その刊行収入をもとに戦没学生記念像「わだつみ像」制作が計画された。学窓から戦場へ出征し、生還しなかった戦没学生の嘆きや怒り、苦悩を象徴して彫刻家の本郷新が制作した。折から朝鮮戦争が勃発し、東京大学への建立予定が不調に終わった三年後、立命館総長・末川博の受け入れ判断にもとづき、像は立命館大学広小路学舎に移送され、一九五三年二月八日に除幕、「わだつみ像」前での「不戦の集い」が開かれた。今年はそれから五〇年目にあたる。

二〇〇三年は、これら一連の歴史的事実を回顧するとともに、二一世紀における大学と社会の関係、大学自治の今日的なあり方を考えるに相応しい年でもあった。この記念すべき年に実施した本企画は、学内外の大きな関心をひき、平和的共生を希求するわが立命館の新世纪への息吹を感じさせた内容となった。以下にその取組みを常任理事会報告（二〇〇三年一月五日）をもとにしながら、それを筆者の責任で加筆して記録として留め、今後の参考に供したいと思う。

二、平和企画の概要

テーマ「二一世紀における共生の可能性を求めて―大学の挑戦―」

―京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、「わだつみ像」建立五〇年記念―

日時 二〇〇三年一〇月二四日（金） 一三時～二〇時

一部講演会・二部シンポジウム・三部記念パーティー

於 立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム

特別展

於 立命館大学衣笠キャンパス図書館一階（二〇月二一日～二一月二六日）

* 特別展の展覧細目については【別紙二】を参照のこと。

一部 講演会「京大事件の今日的意味」（二時～二時五十分）

司 会 佐上善和（立命館大学研究部長）

主催者挨拶 久岡康成（立命館大学教学担当常務理事）

来賓挨拶 園部逸夫（立命館大学大学院法学研究科客員教授・元最高裁判所判事）

佐伯千仞（立命館大学名誉教授）からのビデオメッセージ

映画上映 「学徒出陣」

講演 演 上田 寛（立命館大学法学部長）

「京大事件と立命館大学法学部―今日的意味に触れて」

松尾 尊允（京都大学名誉教授）

「現代史における京大事件の意味」

二部 シンポジウム「二世紀における共生の可能性を求めて―大学の挑戦」（二五時二五分―一七時二〇分）

司 会 小畑力人（立命館大学教育研究事業部長）

主催者挨拶 佐々木嬉代三（立命館大学副学長）

シンポジウム 「二世紀における共生の可能性を求めて―大学の挑戦」

〈コーディネータ〉 安齋育郎（立命館大学国際平和ミュージアム館長）

〈パネリスト〉 長田豊臣（立命館総長・立命館大学学長）

バーナード・クリック（ロンドン大学バークベック校名誉教授・政治学者）

朱成山（侵華日軍南京大屠殺遇難同胞祈念館館長）

質疑討論

閉会の辞 川本八郎（学校法人立命館理事長）

三部 記念パーティー（一八時―二〇時）

場 所 京都全日空ホテル二階 朱雀の間

司 会 上田 寛（立命館大学法学部長）

乾 杯 川本八郎（立命館理事長）

挨拶 園部逸夫（立命館大学大学院法学研究科客員教授・元最高裁判所判事）

高橋寛治（元立命館大学一部学友会委員長）

松岡正美（立命館大学名誉教授・元立命館大学学生部長）

吉田健一（元立命館大学一部学友会委員長）

スライド上映（説明・筆者）

謝辞 芦田文夫（百年史編纂室長）

* 各挨拶と謝辞の内容については【別紙二】を参照のこと。

特別展 戦争と平和、立命館の歴史に学ぶ

—京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、「わだつみ像」建立五〇年記念—

場所 図書館一階

期間 一〇月二一日（火）～十一月一六日（日）

三. 実施体制

実行委員長 佐々木嬉代三副総長

副実行委員長 上田寛法学部長

実行委員 安斎育郎国際平和ミュージアム館長、芦田文夫百年史編纂室長

出口雅久国際教育・研究推進副機構長

事務局 局長 小畑力人教育研究事業部長

事務局 谷中晃総務部次長、武山精志国際部次長、鈴木元教学部次長、藤田惇人総務課長、

相根誠国際課長、西川幸穂広報課長、鳥井真木メディアサービス課長、

祝迫一法学部事務長、友藤信明教育文化事業課長、および筆者

四、開催までの取組み

- ①企画チラシ作成（四〇〇〇枚）学生・教職員を対象に配布、法学部はクラス配布（二〇〇〇枚）
- ②法学部独自の京大事件等のピラを作成し、法学部学生に配布（約二〇〇〇枚）
- ③立て看板作成（BKC掲示の一枚を含め、合計七枚作成・掲示）
- ④参加者配布用「リーフレット」作成（二〇〇〇部）
- ⑤法学部学生へのメールマガジン配信（二回）
- ⑥法学部教授会での参加要請（二〇月七日）
- ⑦新聞各社へのリリースと掲載

一〇月二〇日に京大記者クラブへ上田法学部長、小畑教育研究事業部長、高見澤広報課長補佐、および筆者が外向き記者会見を行った。新聞各社の掲載とその見出しは次の通りである。

「京都新聞」(二〇月二一日朝刊) 京大事件七〇年を記念—立命大が二四日公開講座—きょうから資料展も
 「朝日新聞」(二〇月二二日朝刊) 滝川事件から七〇周年—二四日に講演会—当時の関係者ら出席
 「読売新聞」(二〇月二三日朝刊) 滝川事件七〇年記念の講演会
 「毎日新聞」(二〇月二四日朝刊) 滝川事件から七〇年で記念講座
 「毎日新聞」(二〇月二五日朝刊) 学問の自由、自治考える—滝川事件七〇周年講座—学生ら熱心に—立命館
 大—

なお、学生が発行している新聞の掲載は、次の通りである。

「news立命」(二一月一三日) 京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、『わだつみ像』五〇年—歴史の節目を回顧—戦争と平和を考えるシンポジウム開催
 「立命館大学新聞」(二一月二〇日) 戦争と平和を学ぶ展示会—立命の歴史から

五. 本企画の小括

(一) 参加状況

一部講演会は約二三〇名、二部シンポジウムは約一四〇名の参加者であった。一部講演会が終了した時点でかなりの参加者が退席したが、逆に、シンポジウム開始後に参加した人も一定数あった。一・二部の参加者総数は約二四〇名で、その内訳は、約六割が市民、約二割が学生、約二割が教職員であった。

京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、「わだつみ像」建立五〇年記念というテーマのためか、参加者は若い学生より年配の市民が多かったことが特徴であろう。法学部の学生をはじめ全学的にも広報活動を強めたが、学生の参加が少なかったのが些か残念であった。

(二) 企画内容

一部講演会は、上田寛法学部長の「京大事件と立命館大学法学部—今日の意味に触れて」、松尾尊兌京大名誉教授の「現代史における京大事件の意味」（講演レジメ用意）は、ともに企画意図にそった講演内容であり、開講趣旨も参加者に十分伝わり開催の目的は果たしたといえよう。特に、大正デモクラシー以来の教授会自治の慣行が、京大事件によって壊されたその歴史と今日的教訓に言及された松尾教授の講演には、参加者の多くがうなずき、熱心にメモをとっておられた。また佐伯先生のビデオも好評であり、映画「学徒出陣」は映像が古く若干見にくかったが、ペンを銃に代えて戦場に散った学徒に涙をぬぐう姿が散見された。なお、講演会の内容は『立命館法学』に掲載される予定である。

二部シンポジウムは、過去の歴史認識について、また、歴史認識のズレを乗り越えるために人類が二一世紀の社会を共生するためにはどうすればいいのか、そして今日、強く大学に求められる課題は何か等について、パネリストの提言の後、フロアからの質問を受けて積極的な意見交換を行った。ただし、一部講演会との関連付けが必ずしも十分でなかったことや時間が足りなかったことが反省点として挙げられよう。なお、シンポジウム「二一世紀における共生の可能性を求めて—大学の挑戦」については『立命館平和研究』に掲載される予定である。

三部記念パーティーには、園部逸夫法学研究科客員教授、松尾尊允京大名誉教授、京大滝川事件記念会代表の井田邦弘氏、内田剛弘氏、長崎陽吉氏、わだつみ像関係者の柳川慶子氏（本郷新氏と子息の令室）、三輪道子氏（一九五三年「わだつみ像」建立時の実行委員長・三輪桂三氏の令室）、一九五四年一部学友会委員長・高橋寛治氏、一九七〇年一部学友会委員長・吉田健一氏、西村清次前理事長、谷岡武雄元総長など約四〇名の参加を得て開催した。上田寛法学部長の司会のもと、園部逸夫、高橋寛治、松岡正美、吉田健一の各氏から挨拶があった。挨拶の後、図書館で開催している「資料展」の一部資料をスライド上映（説明は筆者）した。なお、京大滝川事件記念会から謝金が寄せられたことを付記しておく。

また、二部シンポジウムのパネリストをつとめられたバーナード・クリック教授、朱成山館長は、レストラン「ボルドー」で別途に長田総長主催の懇親会をもった。

特別展は、「戦争と平和、立命館の歴史に学ぶ——京大事件七〇年・学徒出陣六〇年・『わだつみ像』五〇年」というテーマで、図書館一階で開催した。初公開の貴重な資料展示（田中直吉や末川博等の揮毫のある大壺、一九三五年二月付け国体擁護連合会のピラ）などもあり好評を博した。期間中（二〇月二一日～一〇月二六日）の来館者は、二二、〇四八名（学外者二八名を含む）であった。

二〇〇三年二月八日 第五〇回不戦の集い 「わだつみ像」前集会に参加した夜に記す

（総務部次長・立命館百年史編纂室担当）

【別紙1】戦争と平和、立命館の歴史に学ぶ「京大事件70年、学徒出陣60年、わだつみ像50年（展示リスト）」

1. 京大事件

番号	資料名	所蔵	著者その他
1	『刑法読本』（1932年）	立命館大学図書館所蔵	瀧川幸辰著 大畑書店発行
2	『京大事件』（1933年）	立命館大学図書館所蔵	佐々木惣一編 岩波書店発行
3	『この希い結ばれて：京大事件に想う』（1951年）	立命館大学図書館所蔵	京都大学医学部学生有志編・発行
4	『随想と回想』（1937年）	立命館大学図書館所蔵	瀧川幸辰著 立命館出版部編・発行
5	『研究の自由：謂ゆる京大事件』（1947年）	立命館大学図書館所蔵	瀧川幸辰著 生活社発行
6	『刑法講義』（1929年）	立命館大学図書館所蔵	瀧川幸辰著 弘文堂書房発行
7	『激流—昭和レジスタンスの断面』（1963年2月）	立命館大学図書館所蔵	瀧川幸辰著 河出書房発行
8	『美濃部博士の大権蹂躪』（1935年）	立命館百年史編纂室所蔵	襄田胸喜著 原理日本社発行
9	『原理日本』第9巻5号（1933年6月）	立命館大学図書館所蔵	「京都帝大法経学部安動批判号」
10	『原理日本』第9巻6号（1933年7月1日）	立命館大学図書館所蔵	「京大問題の学術的処置」
11	『日本国民』第21年15号（1933年6月11日）	立命館大学図書館所蔵	「京都帝国大学問題解決の方針」
12	『京大問題の真相』（1933年6月12日）	立命館大学図書館所蔵	京都帝国大学全学部学生代表者会議編 政経書院発行
13	『日本国民』（特別号）第21年第16号（1933年6月21日）	立命館大学図書館所蔵	「我建国の精神と立憲政治及び第二維新の動向」
14	『文芸春秋』（1933年8月）	立命館大学図書館所蔵	末川博著「京大問題雑話」（原稿14枚）
15	『改造』15巻Ⅲ号（昭和8年7月号）	立命館大学図書館所蔵	森田繁治「京大事件の処置及び説明」

番号	書簡その他	所蔵	著者その他
16	田中直吉激励の大壺	立命館百年史編纂室所蔵	田中直吉、末川博、永井瓢斉、幽山洞4人の寄書きによる
17	「激」学生有志磯田一郎ら14人による	立命館大学図書館所蔵	末川博宛
18	「我々は何故解決案を拒否したか」 1933年6月16日	立命館大学図書館所蔵	京都帝国大学法学部助教講師助手 副手団
19	「田村徳治・恒藤恭の声明書」 1933年7月22日	立命館大学図書館所蔵	封書（末川博宛）
20	「嘆願書」1933年12月10日 法学部学生一同から有信会あて	立命館大学図書館所蔵	京都帝国大学法学部学生
21	末川博宛河上肇書簡（獄中からの激励書簡）	大阪市立大学所蔵	
22	末川博休職通知	大阪市立大学所蔵	
23	「声明書」田中直吉ほか、1933年7月27日	立命館大学図書館所蔵	田中直吉ほか7名
24	「声明書」京大法学部出身有志	立命館大学図書館所蔵	京大法学部出身者有志団
25	「声明書」学外有信会 1933年12月10日	立命館大学図書館所蔵	学外有信会全国大会
26	「電報」岩波茂雄1933年7月11日	立命館大学図書館所蔵	
27	「評議員会開催案内」1933年5月19日	立命館大学図書館所蔵	京都帝国大学書記官
28	「京大事件34周年記念講演と集会」1967年5月26日	立命館大学図書館所蔵	法学部五月祭典実行委員会事務局
29	京大復帰問題経過	立命館大学図書館所蔵	
30	「美濃部達吉博士、末広徹太郎博士等の国憲案乱思想に就て」国体擁護連合会（1935年2月）	立命館百年史編纂室所蔵	服部健二教授寄贈

番号	新聞・パネル	所蔵	著者その他
31	京都帝国大学新聞1933年(昭和8年)5月21日記事「研究の自由を唱え」	立命館大学図書館所蔵	
32	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)5月25日記事「沸騰する京大問題」	立命館大学図書館所蔵	
33	京都日日新聞1933年(昭和8年)5月25日記事「嵐の中に立つ京大」	立命館大学図書館所蔵	
34	京都帝国大学新聞1933年(昭和8年)5月27日号外「あくまで文政当局と抗争」	立命館大学図書館所蔵	
35	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)5月27日記事「団結固く 辞表託した」	立命館大学図書館所蔵	
36	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)5月27日記事「大学の使命の遂行を阻害する」	立命館大学図書館所蔵	
37	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)5月27日記事「暴風帯の京大から」	立命館大学図書館所蔵	
38	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)5月27日「経済学部の新学生 遂に受講辞退を声明」	立命館大学図書館所蔵	
39	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)5月27日記事「京大法学部教授ら遂に総辞職を断行」	立命館大学図書館所蔵	
40	京都帝国大学新聞1933年(昭和8年)6月21日記事「自由自治の確認」	立命館大学図書館所蔵	
41	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)9月15日記事「京大辞職組、立命に招聘」	立命館大学図書館所蔵	

42	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)9月15日記事「京大の 免官組 大部分立命館入り」	立命館大学図書館所蔵	
43	京都日出新聞1933年(昭和8年)9月15日記事「京大 免官教授ら 立命へ招聘される」	立命館大学図書館所蔵	
44	大阪朝日新聞1933年(昭和8年)9月27日記事「沸き 立つ京大問題」	立命館大学図書館所蔵	
45	朝日新聞「京都府版」2003年(平成15年)8月25日、 26日連載記事「学生と戦争 上・下」	立命館大学図書館所蔵	
46	「申合」(1933年5月15日・末広重雄ほか)〔複製〕	立命館大学図書館所蔵	
47	「申合」(1933年5月23日・末広重雄ほか)瀧川幸辰の署 名もあり〔複製〕	立命館大学図書館所蔵	
48	「声明」(法学部教授会、辞表提出時の声明)1933年5 月26日(末川諸資料1069)	立命館大学国際平和 ミュージアム所蔵	
49	「激励文」1933年5月31日法学部学生一同より末川博先 生あて	立命館大学国際平和 ミュージアム所蔵	
50	京大事件ポスター×2枚	立命館百年史編纂室所蔵	
51	瀧川幸辰(写真)	立命館百年史編纂室所蔵	
52	大岩 誠 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
53	田中 直吉 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
54	加古祐二郎 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
55	佐々木惣一 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
56	森口 繁治 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員

57	田村 徳治 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
58	末川 博 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
59	恒藤 恭 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
60	森 順次 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
61	石本 雅男 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員
62	浅井 清信 (写真)	立命館百年史編纂室所蔵	「京大事件」で立命に招聘された教員

2・学徒出陣

番号	資 料 名	所 蔵	著者その他
63	退学・除名・兵休・復学 整理簿	立命館百年史編纂室所蔵	
64	応召・入営・休学願	立命館百年史編纂室所蔵	
65	兵役休学者イロハ名簿	立命館百年史編纂室所蔵	
66	仮修了証書 田尻博一	立命館大学 国際平和 ミュージアム所蔵	
67	入隊所感のうち 表紙と飯塚以文と汐瀬頼三分	立命館大学 国際平和 ミュージアム所蔵	
68	日の丸寄せ書き 阪倉篤義	立命館大学 国際平和 ミュージアム所蔵	
69	学徒入国のおぼり	立命館大学 国際平和 ミュージアム所蔵	
70	作業日誌 岩井忠熊	立命館大学 国際平和 ミュージアム所蔵	

71	『わかひのち月明に燃ゆ』(1967)	立命館大学図書館所蔵	林伊夫 筑摩書房
72	林伊夫関係資料(論文原稿・日誌2冊・手帳2冊・家族への葉書4枚・恩賜への葉書4枚)	立命館大学国際平和ミュージアム所蔵	
73	秋雨の中、明治神宮外苑競技場での出陣学徒壮行会	立命館大学図書館所蔵	蜷川壽恵著 学徒出陣 吉川弘文館
74	別冊1億人の昭和史 学徒出陣 日本の千死別巻9	立命館大学図書館所蔵	毎日新聞社
75	別冊1億人の昭和史 学徒出陣 日本の千死別巻9	立命館大学図書館所蔵	毎日新聞社
76	1943年(昭和18年)立命館大学出陣学徒壮行会体練大会案内	立命館百年史編纂室所蔵	
77	1945年(昭和20年)立命館専門学校一部法律科学学徒出陣壮行会(写真)	立命館百年史編纂室所蔵	

3・わたつみ関係

番号	資料名	所蔵	著者その他
78	わたつみのこえ 1号 1959年11月創刊	立命館大学国際平和ミュージアム所蔵	日本戦没学生記念会
79	わたつみ像写真	立命館百年史編纂室所蔵	
80	『きけわたつみのこえ』 初版6刷	立命館大学国際平和ミュージアム所蔵	日本戦没学生手記編集委員会
81	わたつみ像バッチ 3種	立命館百年史編纂室所蔵	
82	わたつみ像再建実行委員会印	立命館百年史編纂室所蔵	

83	葉書2枚	立命館百年史編纂室所蔵	わだつみ像再建実行委員会
84	わだつみ像レリーフ	立命館百年史編纂室所蔵	わだつみ像再建実行委員会
85	わだつみ像 ミニチュア	立命館百年史編纂室所蔵	
86	若人の怒りーわだつみの像 京都新聞1955年12月1日	立命館大学図書館所蔵	末川博著
87	わだつみのこえー“不戦の誓い” 特集 1960年12月1日	立命館大学図書館所蔵	日本戦没学生記念会
88	「わだつみ像」再建の訴え 1970年	立命館大学図書館所蔵	「わだつみ像」再建立命館大学実行委員会
89	“わだつみ像” 建立を全国民に訴える 1975年12月	立命館大学図書館所蔵	
90	「立命館学園新聞」1953年10月21日記事 「12月8日に建立 わだつみ像」	立命館百年史編纂室所蔵	
91	「立命館学園新聞」1953年11月1日記事 「わだつみ像遂に来る」	立命館百年史編纂室所蔵	
92	京都大学「学園新聞」「荒神橋事件を伝える」	立命館大学図書館所蔵	
93	「立命館学園新聞」1953年12月21日記事 「厳かに除幕式挙行」	立命館百年史編纂室所蔵	
94	荒神橋、市警前で警官は何をしたか	立命館百年史編纂室所蔵	11・11事件究明教授団
95	11・11事件	立命館百年史編纂室所蔵	11・11事件究明教授団
96	わだつみ像再建をめざして 1970年11月	立命館百年史編纂室所蔵	わだつみ像再建実行委員会事務局
97	立命評論（わだつみ特集号） 1970年6月	立命館百年史編纂室所蔵	立命館大学評論部
98	像とともに未来を守れ 1985年12月8日	立命館百年史編纂室所蔵	立命館大学学友会
99	像とともに未来を守れ 1986年4月1日	立命館百年史編纂室所蔵	立命館大学学友会学園振興委員会編
100	わだつみ不戦の誓い 「岩波ブックレット1994年」	立命館百年史編纂室所蔵	大南正瑛・加藤周一編著

【別紙二】二一世紀における共生の可能性を求めて―大学の挑戦

〓京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、「わだつみ像」建立五〇年〓記念パーティー

園部逸夫法学研究科客員教授の挨拶

ご紹介いただきました園部でございます。本日は二回目の登壇で恐縮しております。京大瀧川事件記念会の事務局が東京にございまして、是非とも瀧川事件の七〇周年という記念会をどこかで催さなければならぬということになりました。それで東京では、五月二六日の記念日に、神田の学士会館に松尾尊光先生にいらしていただいてお話をいただいたのですが、京都で催さないといいのも、どうであろうかと思ひ、考えあぐねまして旧知の松岡先生にお電話を差し上げました。そうしましたら、次第に川本理事長、安齋館長、上田法学部長と話が広がってまいりまして、本日このように「二一世紀における共生の可能性を求めて―大学の挑戦」という立派な企画のもとに、京大事件に関する催しを立命館大学でお引き受けいただいたことに感謝している次第でございます。

京大瀧川事件、これはまことに歴史的な事件でありましたが、率直に申しまして、先ほどのお話の中にも「京大は損をして立命は得をした」との感想もございましたが、それはまあそれといたしまして、いずれにしても七〇年経ちますと、事件が風化しだんだんと当時の関係者がいなくなる。先ほどもビデオでご覧の通り、佐伯千仞先生が京大事件体験者として今や貴重な存在となられました。佐伯先生は、先ほどもビデオで

拝見いたしましたが大変お元気になっておられ、嬉しいことでございます。

京大瀧川事件記念会の方では、当時学生であった樋口和博氏は、今は弁護士ですが、もともとは裁判官でした。元来、大変元気な方で、間もなく九四歳ですが、どうしても京都での催しに行きたいと仰っていたのですが、無理をして京都に行くと脳梗塞を起こすという医師の忠告で本日はまことに残念ながらお連れすることが出来なかつたのです。今日は京大瀧川事件記念会から、井田邦弘、内田剛弘の両氏、いずれも弁護士ですが、これまで会の運営に深く関わっておられます。そして、関西方面での瀧川事件記念会に大変ご協力いただいております長崎陽吉氏もご出席です。

あと一言だけ、ついでもございますが瀧川先生の座右の銘に「汝の道を歩め、人々をして語るに任せよ」という言葉があります。本日の講演会でご紹介しました伊藤孝夫教授のご著書の題名も『瀧川幸辰―汝の道を歩め』(二〇〇三年、ミネルヴァ書房) となっております。これについて、感想を申し上げたいと思います。この言葉は、ダンテの言葉ということになっていますが、これは、ダンテの「神曲」の煉獄編、あるいは浄罪編とも申しますが、その第五歌に出ています。壽岳文章訳『神曲Ⅱ』(集英社文庫五七頁) によりますと、「汝の道を歩め」ではなくて「わたしに従え」というのがもともとの言葉でございます。そして、「わたしに従え、あのやからは語るに任せよ」となっております。ダンテが師ウエルギリウスの後を歩いていると、背後から叫ぶ声をして、ダンテはうしろへふり向くのです。その様子を見て、師が「何故、君の心はそうふらふらするのか」、「ここで私語されていること、君に何のかかわりがある?」「私に従え。あのやからは、語るに任せよ」と言ったというのが元々の言葉の趣旨です。瀧川先生はこれを「汝の道を歩め」と引いておられ

る。どうして、こうなったかと申しますと、マルクス資本論第一巻初版序文の末尾に、フイレンツェ人（ダ
ンテ）の言葉をイタリア語で引用した箇所があり、これが「汝の道を歩め」となっているのです。瀧川先生
はこの言葉をそのまま引用されたのです（『ゆきとき清談』二六頁、一九六四年、河出書房新社）。どうして、
このように違っているのか、疑問に思っていました。が、資本論の二〇〇一年ドイツ版の解說的な注の中に、
このイタリア語は神曲の言葉をマルクスが少し変えて引用したもの（abgewandeltes Zitat）とあります。こ
れが、原語の通り、「私に従え」となっていたら、瀧川先生が、座右の銘にされたかどうか分かりません。私
は、「汝の道を歩め」の方が分かりやすいと思いますが、この部分はむしろマルクスの言葉と申すべきかも知
れません。瀧川先生は周りにいろんなことを言う人々が少なからずいたものですから、それで、「汝の道を歩
め」という言葉が気に入られたのでしょうか。私はそのように理解しております。

さて、京大瀧川事件記念会を今後どうするのか、もう七〇年も経ちまして当時の学生も高齢になり、経験
者も少なくなりました。今までと同じように会を続けるということはなかなか難しいだろうと思います。で
すから、今回でおそらく京大瀧川事件記念会も、まあもちろん消息をお互いに交わすという程度のことでは
きるにしても、大きく発展するということはないと思います。ですから、恐らく最後の機会に、立命館大学
の格別なお取り計らいにより、本日このように立派に京大瀧川事件記念会としても後々に残せるものを催し
ていただいたことを、大変ありがたいことと感謝しております。川本理事長はじめ立命館の方々に衷心より
お礼を申し上げ、簡単ではございますがご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

高橋寛治元一部学友会委員長の挨拶

ご紹介を受けました高橋です。「わだつみ像」建立の時、法学部の委員長をやっておりますその翌年、学友会の委員長をやっております。したがって、第一回「不戦の集い」の実行委員長は私でありました。こんなに大勢の皆さんの前でお話すると言うのはしばらくぶりでございます。

「わだつみ像」の建立と言うのは、一九五三年の一月八日でしたけれども、建立に至るまでには複雑な経過がありました。というのは、「わだつみ像」は当初、東京大学に建てる予定だったので。ところが文部省の圧力で、東大で建てるのが出来なくなりました。それで立命館大学の「わだつみ会」の会長であった三輪桂三君、三輪君は早世し本日奥さんが出席されていますが、三輪君、それから府学連の委員長だった大島渚、立命館大学法学部の大島正明、この三人が寄って「わだつみ像」は立命に建てるべきであるということを協議して決め、その後末川博先生に直談判に行きました。東大に建てられないのだったら、わが立命館に建てようということでも末川先生に相談に行きました。末川先生は了解され、「わだつみ像」の台座は俺のポケットマネーで出すとまで言って頂きました。昨日も大島正明君の所へ電話して、その当時の思い出をお話したのですけれども、今彼は、愛媛県伯方島でひとり、糖尿病で目が見えんようになっており、今日出席できません。皆さんに宜しく言うておいてくれと言っております。その大島が、東大のわだつみ会の本部へ行って、「わだつみ像」を立命館に建立したい旨を説明、要求したら、東京大学のわだつみ会のメンバーみんな喜んで、是非立命館へ持って行ってくれといった。彼は、「わだつみ像」というのは、こんな小さな像だと思っ

ていたらしく、だったら今から抱いて帰るからと言ったら、皆に笑われたらしい。本郷新先生が作ったのは、私の背丈よりもっと高い像だったのです。

その後、「わだつみ像」を立命館に迎えようということで、末川先生がオープンカーに乗られて、後ろに「わだつみ像」を立てて、広小路の立命館を出て河原町通りから円山公園まで、デモ行進をしたのです。その時たまたま私は、全学連の学園復興会議に關連しておりました。その当時は全国の大学は荒れていました。立命館大学でもそうでした。存心館の一六号教室なんていうのは、五人掛けの椅子もどきものに何か将棋の板みたいなものが置いてある、そんな感じでした。こんな条件では勉強は出来ないということで、全学連の学園復興会議を京都大学で開催しようと京大に会場の交渉に行ったんですけれども、京都大学はそれを拒否したのです。それでその時、私はたまたま京都大学に抗議に行っていたんです。そうしたら警察隊が動員されて、ボコボコになって学生の私たちは放り出されたのです。これはまずいことになったと思っていた矢先、たまたま立命館大学から、オープンカーに乗った「わだつみ像」が、京都市内をデモ行進するという話を耳にしたので、それに合流しようということになったのです。確か一九五三年の十一月一日です。京都大学の医学部の中をずっと通って、鴨川の荒神橋上で、後ろから川端署の警察官がバアーと襲い、早よ、中立売所の管轄に行けということ、行ったところが前には中立売署の警察官が、待ち構えていました。それで真ん中で挟み撃ちに遭ってしまいました。あの当時荒神橋の橋の欄干は木造でした。半ば朽ち果てていましたからバーンと落ちて、京都大学の学生一〇何人が、あの橋の上から落ちた訳です。私ももう一列横だったから落ちていただろうと思います。上から見たら血が流れています。あの橋の上から、どうして私が飛び降り

たのか、いまだに分かりません。メガネをかけた学生が、血をダラダラ流している。持っていたハンカチを顔に被せて、京都府立病院へ運びました。しばらくして、「わだつみ像」が立命まで帰って来ました。そして中川会館と存心館の前で、「わだつみ像」歓迎集会が開かれた時、私はそのハンカチを持って、「この血塗られた弾圧を見よ」と言って、叫びました。あの当時朝鮮戦争が終って、日本の軍事基地が拡充・強化される時でした。私ら「出町寮」と言う立命の寮に住んでおりましたけれども、学友会の活動をやって家に帰るまで、警察官の尾行がつくんです。官憲はこんな左翼運動やる奴は、徹底的に弾圧すると言ってはばかりません。もちろんその前にはレッドパーズもありました。そんな中で私らは、この「わだつみ像」だけは建てなければいかんと言うふうに思ったわけです。

「わだつみ像歓迎集会」はただちに「荒神橋事件弾圧抗議集会」にきりかえられた。知らせを聞いた市民、労働者、学生がぞくぞくと集まり、研心館と校庭は多くの人々でいっぱいになった。夜七時頃だったと思います。ただちに中立売署に抗議デモを敢行し、「国際学生連盟の歌」、「平和を守れ」、「暴虐の雲 光をおおい 敵の嵐はあれくるう ひるまず進めいさましく……」と「ワルシヤワ労働歌」を歌い、固いスクラムを組んで進んだ。中立売署前の抗議集会は、署長との面会も拒否されたところか、生れてはじめて催涙弾と警棒による、なぐる、けるの弾圧でした。

多くの学生市民は、再び血を流したのです。F君なんかは、頭をわられ、その時の後遺症で長い間入院しました。その時のことを思うと今でも当局に対する憎しみと心のいたみをおぼえます。

何故私が立命館に来たかと言いますと、これはまた不思議なご縁でした。「瀧川事件七〇年、学徒出陣六〇

年、わだつみ像建立五〇年」、今私はご案内を頂いて、七〇、六〇、五〇、と言うのを見た時に、はっと思いました。私の兄は、特攻隊で戦死しました。遺骨が帰ってきました。遺骨を開けたときに中に、英霊と言う位牌が入っただけでした。黙って戦争に赤紙で引っ張られて、特攻隊で戦死した。その時私は高校生でした。どの大学に行くか、ということ考えた時に、立命館大学の法学部というところは、末川先生をはじめ、瀧川事件で京大を飛び出した先生方が、戦後「平和と民主主義」という立派な教学理念をたてて新しい大学を創っているということを、私は担任の先生から聞きました。私は当時、貧しい農民の息子でしたので、私学の授業料を出すのも大変だったけれども、「俺はこの大学に行って勉強してくる」と言って立命館に来たのです。

「瀧川事件七〇年、学徒出陣六〇年、わだつみ像建立五〇年」という本日の平和企画のテーマ、これは日本の歴史の縮図であると同時に私の人生の縮図のような気がします。末川先生も、本当に色々面倒看ていただきました。立命館大学の構内に末川記念会館があります。私の息子も立命へ行きましたんで、息子が入学する時、親が大学に行くのは恥ずかしいと思いましたが、「それでもお父さん行きなさいよ」と嫁さんに言われて、大学に行き、末川記念会館が出来ているという事で見に行ったら、末川先生が「わだつみ像」建立の時の演説の写真が載っていました。その横に私が写っていました。私は驚愕しました。それで息子に、これはお父さんやで、と言ったら、うわあとかいって驚いていましたね。私、息子に言ったのです。立命館は、単なる縁で入った大学ではないんだ、「平和と民主主義」と「学問の自由」のために戦ってきた大学なんだということをも身をもって感じて勉強しなさい、と。私は息子にも娘にもこういうことを語れることをこの上な

い喜びに思っております。

ひとつだけ言わせてください。あの末川先生が、「未来を信じ、未来に生きる。そこに君達青年学徒諸君の尊い生命がある。わが立命館は現代に役立つ学問をするのではない。未来に役立つ学問をするのがわが立命館の命なんだ」といわれ、入学式や卒業式、いろいろな演説でもそのことをいつも強調されてきました。末川先生のあの魂、それを今でも私は忘れる事が出来ません。二一世紀の今、イラクに自衛隊を派遣するという問題が起こっております。既に毎年一二月八日に、大阪の高島屋の前で「赤紙や」、「これが昔の招集札状だ」と言ってばら撒いている婦人団体の方もおります。私は今国家によって、自衛隊の若い人達が戦争に駆り立てられてるんだと言うことを、自衛隊の諸君にも訴えたい。戦争に行くなノ戦うなノアメリカの哲学は、「戦争は平和である」という哲学です。特に一昨年九・一一以後は、我々に逆らうものは徹底的に叩くんだという思想です。戦争は平和なんだ、国民の平和なんだという思想です。日本でも戦前はそうでした。明治以降、ヨーロッパの文明を採り入れて、中国やら朝鮮半島やら東南アジアへ進出・侵略すること、それが平和なんだと言ってきたわけです。今日本の若者達が、招集札状なしにイラクに派遣されるということ、それは私は許してはならない。イラクは正にベトナム化しつつある。あそこにはジャングルはありません。だけれども砂漠と言うジャングルがあるんです。そして今、憲法を改正する、その危機がきている。自衛隊を徴兵すると言う事を、政治日程に乗せている現実があるわけです。私はそれを容認してはならない。今までの哲学も、経済学も、政治学も、思想も、全てのものは、平和と言うものに対してどれだけ貢献出来るかと言うことを、今、我々は、残されたものとして、考えなきゃならんのではないかと思います。

もう私も七〇歳になりました。この次の「わだつみ像」六〇周年記念には、皆さんの前に顔を出す事が出来るかどうか分かりません。間もなくあの世に逝くかもしれない。しかし残されたものは、あとに残すものは何か。息子にも、家族にも、そして何よりも広く人類のために、戦争をやらない、この哲学を残していかなばならない。これが私の生き様だというふうに考えております。長いこと喋りましたけれども、燃えてくると止められません。ここに三輪道子さんがいらつしやいます。私が法学部の執行部で一緒に活動していた三輪桂三君の奥さんです。彼は「わだつみ像」の前で、「永久にこの『わだつみ像』を守っていかなければならない。それしか俺達の生きる道はない」と言う、「不戦のつどい」を読んだ人です。彼は若くして命を絶ちました。あの田中関田町の辺りに、京都平和委員会と言うぼろぼろの家がありました。そこで彼は汚い書類の山を整理しながら、「日本の平和のために俺は命を尽くす」と言っておりました。そう言って死んでいった三輪君のために、私は感謝の気持を残したいと思います。それ以後私は学友会の予算でも、「不戦のつどい特別予算」と言うものを特別にとつて、毎年不朽にこの「不戦のつどい」を続けようと言う事を訴えてまいりました。今日たまたまこう言う形で、「瀧川事件七〇年、学徒出陣六〇年、わだつみ像建立五〇年」こんな偶然があつたのかと言うことを私自身も知らなかつたです。今私は長い間生きてきて、この機会に恵まれたことを、この上ない喜びとするところであります。長くなりましたが、この集まりのご挨拶にかえさせて頂きたいと思ひます。有難うございました。

松岡正美元法学部長の挨拶

皆さん今晚は。松岡です。ちょうど一月の半ばくらいだったのでしようか、園部さんからお電話をいただきました。夜中一時くらいだったでしょうか。それから一〇ヶ月経ちまして、本日「京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、『わだつみ像』五〇年記念」の催しが成功裡に終わったことを喜んでるところであります。若者、学生が少ないのが少し残念ではありませんけれども、とにかく大変立派な企画と豊かな内容の催しになり、園部さんともさきほど喋っていたのですが、ともに喜んでるところであります。

高橋寛治さんとも久しぶりにお会いしまして、先ほどのご挨拶での熱弁、四〇年ぶりくらいに聞く「寛ちゃん」の熱弁に懐かしく聞き入っておりました。高橋さんは七〇歳とおっしゃいましたが、私はこの一〇月二〇日に七二歳になりました。本日の平和企画のテーマ「京大事件七〇年、学徒出陣六〇年、『わだつみ像』五〇年」に即していいますと、私たちの世代は、何ととっても「わだつみ像世代」とでもいえる世代なのですね。

個人的な体験をいいますと私、「わだつみ像」とはものすごく縁が深く、さきほど高橋さんが「わだつみ像」建立にかかわるお話をいろいろされましたが、「わだつみ像」建立その日に、私は初めて立命館大学の門をくぐったのです。学園復興会議の最後の打ち上げが予定されておりました。皆さんもご存知ですが、広小路学舎の大学院の学園ホールで、全国から集った学園復興会議の、これは「わだつみ像」の歓迎ということを含めて全国から集った学園復興会議の最後の打ち上げがありまして、そこへ私ちように京大を卒業いた

しまして、大学院に入つて半年ばかりの一月一日、「京大合唱団」の連中二〇何人を引き連れて最後の出演、歌唱指導に入つておりまして、そこで荒神橋事件なるものが起つたということを聞いたわけです。そのまま我々合唱団の二〇何人は、高橋さんらの「扇動」に乗せられて一人残らず京都市警前までデモを行いました。一千人くらいの、肃々と最初から最後まで本当に模範的なデモではありましたが、公安条例に抵触するとかで、蹴散らかされてしまいました。初めて権力というもののそういうえげつなさというのを知りました。後のキンデンの副社長、いや社長になり損ねた、倉野昌夫という人も一緒でした。何とそれから二年後の一九五五年には、立命館大学法学部の助手に採用されてそれで三輪桂三さんや、高橋さんにも又お会いすることになるわけです。

それともう一つ、「わだつみ像」に関して、これだけは申し上げておかなくてはなりません。この大切な「わだつみ像」の十六年後の破壊のことですね。それについては皆さんのお手元に差し上げてある「六九・五・二〇の証言―『像とともに未来を守れ』をご覧ください。これは私の一生のなかで一番熱を込めて書いた文章ではないかと思つていますが、いろいろ血生ぐさいことも想起しますが、目の前になによりも一番感動いたしましたのは、私のゼミの学生達が全共闘によって負傷した学生を介抱し、そうして「わだつみ像」破壊に対して熱烈なそして整然たる抗議を行なつたことです。私たちは研心館に閉じ込められて、学生もひどいことになっていました。最後は一瞬に片付きました。そして大きな転機が私の目の前で起こりました。「わだつみ像」建立のときに私らは警官に蹴散らかされましたが、警官隊の具体的な動きを含めて綿密に書いたつもりです。ぜひお読み通しただけがあればありがたいと思います。同じく機動隊の動きの中で「わだつみ像」

は破壊されたのです。末川先生が一番お元気だったのは正にその時期の頃だったと思います。「証言」の後ろの方には多少悪口も書いてありますが、これはもうご勘弁ください、その中で「一部の奇をてらう評論家諸氏は、思いつきの『虚像論』をもちだして、「わだつみの像が大学の一隅から消えることは、日本の平和運動にとってむしろよいこと」と断じたのは星野芳郎先生でありました。それだけではなく「あるいは更にひきずり倒され陵辱された像の姿に思わず『うむ、すごい』『凄絶の美』だという放言までなされたのは奈良本辰也先生であります。あとはご反省なさった筈で死者に鞭打つつもりはございませんが。とにかくそういう「時代を動かす力はすべて像破壊者たちのような『狂気』からこそ生まれるとまでいって、この明らかに卑劣な破壊行動を美化」なさったのです。実は、梅原猛先生もすこしそれに近いような言動をされてきました。最近では本当に反省なさったようで、立派なことをたくさんなさっております。まあ人間に誤りはつきものですから常にわれわれ反省もいりますが。ともかくこの「盲動に加わった日本的な高度成長のあわれな落し子たち」そういうかわいそうな若者達をそこまで追いやり貶めることはあるまいと思います。

最後にもう一言。今日のシンポジウムにも発言がありました。高橋さんも大変熱烈に言ってくれました。まさに新世紀においてそういうことが許されてはならない。愚詠を一つだけ披露させていただきます。「学問の自由と若き生命の新世紀にて奪わるまじく」。大南正瑛（前総長）が「これはいい歌だ」と誉めてくれました。この七十年、六十年そして五十年の歴史を直視し、教訓化し、そして激動の新世紀を我々一緒に力を合わせて切り開いていこうではありませんか。高橋さん、やっぱり一〇年経ってもまたここで集りましょうよ。皆さん、元気で集りましょうね。どうも長々とごめんなさい。

お久しぶりにお会いする先生方と、初めてお会いする先生方がおられますが、私は率直に言って、非常に半分肩身の狭い思いの時代の学友会委員長をやらせて頂きました。私が入学したのが一九六七年の年でありまして、「わだつみ像」が破壊されたのも、ちょうど私が在学中で、しかも学生自治の組織においては一応最高責任者としての立場におりましたですね、私の眼前で起こった出来事でもありました。「わだつみ像」の破壊は、非常にショッキングな事件で、いまだに記憶に鮮明に残っています。

先ほど紹介しましたように、私は六七年の入学ですので、入学した時から大学に入学したという意識があまりなかつたですね。いわば活動するために入学し、紛争の終息と共に卒業したという感じです。実際、卒業した次の月ですね、放心状態に陥りましたね。

在学中は、ある意味で別世界にいたというか、ずっと大学に泊り込み、お風呂にも入らない、ご飯も食べない、そんな毎日でした。封鎖とかバリケードとか機動隊とか全共闘とか、毎日毎日次から次へとそういう事件に接してありまして、とりあえずは身を守りながらですね、日々生き延びていくこと、これが最大のテーマでした。それらの中で当然、平和と民主主義とか学生自治会の具体的な要求とかも実現しなければいけない訳で、私の二四時間の生活全てがどっぷりとその中に漬からざるを得ないという、そういう状態の日々を丸四年間送らせて頂きました。

色んな陰口を耳にしたものです。例えば、「あかつき部隊」だとか、研心館の地下には何かがあるだとかで

すね、あの地下道はどっかと通じている秘密の通路とかいわれましたね、それこそイラクのフセイン政権に囁かれたようなことまでいっぱい言われたものです。研心館なんかでよく寝ていたのですが、夜寝るにもダンボールが必要でよくダンボールの取り合いなんかをやったものです。ダンボールと言うのはなかなか保温の機能があるということを、私生まれ初めて知りまして、それ一枚上に被り下に置くだけで、結構眠れるものだなあということもその時非常によくわかりました。

私の場合は入学した時から、たて看書きから始まりまして、ビラ配り、それからクラスに入っただけのオルグ活動です、よく行ったものです。講義には殆んど出席しなかったのですが、ゼミは先程スピーチされました松岡先生のゼミに、私一応名前の方は登録したのですが、あまり出席をしたという記憶はありませんで恐縮しています。講義や試験のことで記憶に新しいのは、大学紛争が一番激しかった年にすね、後期試験が実施できないという時があったのです。この時に試験を実施すべきか、レポートにするかということでも論議があり、最終的にレポートにするという判断、英断が下りまして、内心ほっとしたという記憶があります。もしあの時レポートじゃなくて試験をされてたら、おそらく卒業証書は手にしてなかっただろうなあというふうに思っております。

「わだつみ像」が破壊されたあとも、必ず毎年、どんなことがあっても「わだつみ像」の前で、一二月八日には「不戦の集い」というのを全学挙げて行く、たとえばどんな雨が降ろうが風が吹こうが絶対にこれだけは、単なるセレモニーとしてじゃなくて、決意を新にするという意味で、全学挙げて取り組んだという記憶を今も鮮明にもっております。非常に激しい闘いでした。というのは、肝心の反戦平和という、本来向けて

いくところに矛先を向けるまでに、周囲との戦い、組織的な戦い、障害物を除去する戦いを強いられました。何かひとつテーマに向かおうと思うと、必ず何か障害物があらわれてくるという、その繰り返しの大学四年間だったように思います。

したがって、いま冷静になって当時を回顧しますと、ただただ平穩のなかで勉強だけをしたり、無目的に学校に通っていた時代と比べますと、私たちが過ごした大学の四年間というのは、もの凄く勉強になったものの考え方とか、折衝の仕方とか、組織と人間のありようとか、実に多くのことを体験し勉強したと思います。思えば、先生方とも非常に無茶な交渉もやらせて頂きました。一九七〇年の終わりから七一年にかけては、全共闘との戦いも決着をつけまして、学園がいよいよ正常化して新しい立命館の学園を築こうという矢先に、学費値上げが提起されました。これは闘う我々学友会の方も、迎えて頂く理事会・先生方の方もですね、いわば良心的な基盤のもとで闘わざるを得ないという、逆の意味で困難な闘いでもあったわけですから、その学費値上げ闘争のいわば「触れなば落ちん」という所までいつときながら、最終的にはもっと高度な諸課題を達成する為に、学生の方で最終的な矛先をちよつと換えて収めざるを得なかったことも正直ありました。

以上申しあげた学園正常化闘争や学費値上げ闘争が、今日の立命館大学にどう繋がったかという詳細は、私全く分からないのですが、立命館大学の四年間の大学生活が私の人生にとって極めて貴重で有益な経験であったことは確かだと明言できます。大学のますますの発展と今後とものご交誼をお願いして挨拶を終えることにします。ありがとうございました。